



◎校訓は「天分發揮」、教育目標は「友愛・自律・進取」。東大・国立医学部コース、難関大コースの2コース制。英語スピーチコンテスト（全学年）、広島平和学習（中3）、生徒有志による英字新聞作りなど、グローバル教育にも力を入れている。

設立	1982(昭和57)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約150人
2015年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、筑波大、東京大、東京工業大、名古屋大、京都大、岡山大、広島大、徳島大、香川大、九州大などに43人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、大阪医科大、関西学院大、川崎医科大などに延べ166人が合格。
住所	〒701-0206 岡山市南区箕島1500
電話	086-282-6336
Web Site	http://www.okayama-h.ed.jp/

岡山県・私立
岡山中学・高校

指導力向上

教師の意識改革を進め 学校全体で 生徒一人ひとりを見守る

変革のステップ

<p>背景</p> <p>◎受け身がちで自分に自信が持てない生徒が少なくなかった。生徒指導が徹底されていなかったため、生徒の規範意識も希薄だった</p> <p>STEP 1</p>	<p>実践</p> <p>◎生徒指導の統一、主体性を育むための行事改革、基礎学力育成のための指導改善など、総合的な改革を推進</p> <p>STEP 2</p>	<p>成果</p> <p>◎生徒の表情が明るくなり、積極的・主体的に活動に取り組む意欲が高まる。指導力向上に向けた教師の意識も向上</p> <p>STEP 3</p>
---	---	--

全校体制で着手した生徒指導が
10年に及ぶ改革の幕開け

私立中高一貫校の岡山中学・高校は、例年、多数の国公立大合格者を出す。特に、2014年度から2年連続で国公立大医学科の合格者数が2桁となり、近年ではアメリカのトップ大学の1つであるコーネル大などにも合格者を輩出。現在、同校は、2014年度に就任した鷹家秀史^{ひでし}校長の下、教科指導や学校行事、校内分掌など、大規模な学校改革の真ただち中にある。改革前、課題は山積していた。その1つが、生徒の気質の変化への対応だ。生徒は、素直で真面目な一方、受け身の姿勢が目立ち、自己肯定感が高くなかった。進学実績に影響は見られなかったが、学力を十分に伸ばし切れていないと感じる教師も少なくなかったという。生徒に自ら学ぶ意欲や姿勢を育む必要があり、そのためには、教師の意識改革、指導改善が必要だった。

同校の改革には前史がある。十数年前、現場の教師の働き掛けによって、生徒指導改革に乗り出したことが、現在に続く改革の始まりだった。10年前に赴任した生徒指導部長の中川英^{ひで}先生は、当時を次のように振り返る。

「どの先生も熱心に生徒指導をしていますが、校内で指導方針が統一されていないかつたために指導が行き届かず、容儀の乱れや時間を守らない生徒がいました。どのような生

徒をどう育てていくのかという意識が、教師間で共有されにくかったのかもしれない」

そこで、中川先生が中心となり、生徒指導部で作り上げたのが、生徒指導のしおり『岡山中学校・高校の生活』だ。これは、授業の受け方やノートの取り方、日常の礼法や服装、休み時間や放課後の過ごし方、図書館の使い方などを記載した、言わば「学校生活の教科書」である。

生徒がそれらを実践できるよう、中学校入学直後の4日間にオリエンテーションを実施。この期間は授業を行わず、校歌や校訓の意味を考



岡山中学校・高校
明楽 晃 みやうらく・あきら
教職歴21年。同校に赴任して22年目。進路指導部長。「何事も生徒目線・保護者目線で行動する」を求める視野を持つ。



岡山中学校・高校
中川 英 なかがわ・たけし
教職歴21年。同校に赴任して10年目。生徒指導部長。「マンネリは進歩の敵。常に新しいものを求める視野を持つ」



岡山中学校・高校
石井 大祐 いしい・だいすけ
教職歴15年。同校に赴任して10年目。広報副部長。「ティーチャーよりも、コーチャーとして生徒とかわる」



岡山中学校・高校
鷺見 香織 すみ・かおり
教職歴16年。同校に赴任して10年目。2学年主任。「Go and Try with a smile! 人にやさしく」

えたり、教師が生徒と一緒に通学路を歩いたりするなど、学校生活に慣れることを重視するようになった。それまでの同校にはない指導法に、当初は異議を唱える教師もいた。しかし、生徒が変化していくに連れて、そうした声はなくなっていった。2学年主任の鷺見香織先生は言う。

「生徒が教師の目を見て話すようになり、授業態度が格段に良くなりました。最も大きな変化は、生徒がきちんと敬語を使えるようになったことです。大人と対等に向き合っていて生徒と教師との距離が近くなったと感じています」

生徒指導の徹底により、生徒の間に教師の指導を受け入れる素地が出来たことが、教師の自信につながり、その後の改革に道筋を付けた。

学年団の持ち上がりを廃し、1年間全力で指導する意識が定着

生徒の生活態度が良くなる一方で、受け身な氣質が気になるようになり、厳しい指導にも食らい付いてくるたくましさや、他人と異なる意見を述べる勇気などをいかに身に付けさせるかが課題となった。もっとも、そうした生徒の氣質は、教師のかかわり方にも一因があったと、広報副部長の石井大祐先生は語る。

「本校では、基本的に学年団は6年間持ち

上がりでした。生徒と長い時間過ごしていると、生徒が考えていること、欲していることが言葉にされなくても分かってきます。すると、教師はつい先回りして、声を掛け、助け舟を出してしまう傾向にあったのです。手厚い指導がかえって生徒の自立を阻んでいました。そして、学年が持ち上がることで、『来年またチャンスがある』という教師の考えの甘さを生んでいました」

そこで、14年度から6年間の持ち上がりをやめ、中高とも基本的に毎年、学年団の大半を入れ替えることにした。生徒は、毎年新しい先生と出会う中で自分を表現する方法を模索するようになり、教師は「1年1年が勝負」という強い気持ちで指導に臨むようになった。進路指導部長の明楽晃先生は、「新しい出会いが、生徒の殻を破るきっかけになっている」と指摘する。

「6年間の持ち上がりは、教師の生徒に対する見方や評価を固定化し、指導の幅を狭めていました。1人の生徒に多くの教師がかかわることで、個々の生徒を多面的に捉えられるようになったと思います。これにより、生徒の潜在能力を引き出せるようになりました」
14年度には、「Classi」(*1)を全校体制で導入。定期考査や模試の成績、部活動の実績、生活状況などの情報を、教師間で共有し、学校全体で生徒一人ひとりを支える体制が整った。ツールを統一したことで、若手教師だけでなく

*1 ソフトバンクとベネッセの合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。



Classiの「生徒メモ」は、生徒の日々の情報を記入する欄。教師が気付いたこと、他の教師と共有したいことを記入すれば、すみやかな目線合わせが可能となる。
*学校資料を一部改編して掲載

ベテラン教師もしっかり活用している(図)。

「教師1人に1台のタブレット端末が配備されたので、いつでも生徒の状況を把握できます。『Classi』の情報を基に、部活動の試合の翌日、生徒に『昨日は活躍したらしいな』と話し掛けると、生徒はうれしそうな顔をしていました。生徒に声を掛けるきっかけを得られることで、生徒とのコミュニケーションが更に取りやすくなりました」(明樂先生)

生徒のアイデアを行事に取り入れ 主体性を育む

主体性を育むための工夫として、入学式や体育大会など、あらゆる学校行事に生徒が活躍できる場面を増やした。中学校の卒業式では、生

徒会の役員が増上でメッセージを述べ、入学式では、新入生や保護者の緊張を和らげようと、生徒がコミカルな寸劇を演じた。体育大会や文化祭では、競技種目の選別やユニフォームのデザインなどに、生徒の提案を出来るだけ取り入れた。「自分たちで学校を変えられる」と分かるに連れ、生徒から積極的にアイデアが出るようになり、自主的に朝練習を行うクラスも現れた。行事を通じて、生徒の視野を広げる工夫もしている。特に、進路観の育成や体験活動に課題があった中学校では、14年度に2つの活動を取り入れた。1つは中学2年生での職場体験だ。生徒自身が岡山市や倉敷市の企業の中から訪問先を探し、訪問の約束を取り付ける。

「事前に、訪問する職場に関係する社会問題を新聞やインターネットで調べ、訪問時にインタビュするなど、NIE(*2)の要素を取り入れました。働く意義を知るだけでなく、社会問題に対して当事者意識を養うことにもつながっています」(鷺見先生)

生徒の経験値を高める 体系的な振り返り

もう1つは、中学3年生で行う「冒険合宿」だ。公益財団法人日本アウトワード・バウンド協会(*3)の協力を得て、生徒自らの力で困難を克服していく体験活動を行った。数人のチ

ームで協力して、4メートルの壁をよじ登ったり、高さ50メートルのつり橋をロープ1本で下りたりする。そうした実体験を通して、困難に思えることも、みんなで力を合わせれば乗り越えられることを、生徒は体で学んでいく。

冒険合宿の最大の特徴は、活動後の振り返りだ。これはアウトワード・バウンドのノウハウだが、一つひとつのアクティビティ後に「活動をしている時に何を考えていたのか」「どんな時に不安になったのか」などを具体的に語らせ、更に冒険合宿の終了直後や3か月後にも「あの時と今でどう違うか」を振り返らせる。

「漠然とした感想ではなく、自分の内面を振り返り、自分の経験を言葉にすることで、生徒は体験から得たものを自覚し、次に生かせるようになります。適切な振り返りをタイミングよく行うことで、生徒にとって行事の価値が一段上がることを改めて感じました。一つひとつの行事の狙いを明確にして生徒に伝え、体系的な振り返りの手法を確立していきたいと考えています」(鷺見先生)

高校1年生では、イギリスのイートン校への修学旅行があり、生徒は更に視野を広げていく。

教科横断の授業研究、教材研究で 教師の指導力向上を図る

生徒の変容を受けて、同校が今、最も力を入

*2 Newspaper in Education の略。新聞などを教材として活用する教育活動。
*3 イギリスで開設され、現在は世界30か国以上にネットワークを持つ非営利の冒険教育機関。

れているのが授業改善だ。そのための取り組みは大きく分けて2つある。

1つめは、14年度に始めた教科横断の授業研究だ。研究テーマは、「ICTの使い方」「双方向授業」など、互いの教科の専門的な部分からなくとも、議論できるものを設定。生徒との双方向のやり取りは成立しているか、ICTの使い方は効果的かなど、教科の枠を超えた議論が活発に行われた。

もう1つの取り組みは教材研究だ。教科ごとに、使用する教科書を見直し、指導法を話し合うなどして、指導を根底から問い直している。そうした議論を通して、学年ごとに押さえるべきポイント、身に付けさせるべき力は何かといった共通理解が形成されていった。

「ある教科では、生徒に高い学力を付けたいと、難易度の高い教科書を使っていました。しかし、議論の過程で、基礎を固め、難易度の高い問題に取り組むことで確かな学力が身に付いていく、という発想の転換が出来ました。そこで、標準レベルの教科書で、生徒が基礎から発展まで学習できるように、指導を見直したのです。教師には高い指導力が求められますが、生徒の意欲が高まり、学力も付いてきていると感じています」（明樂先生）

今後は、アクティブ・ラーニングや反転授業、ICTの活用などの研究を進め、講義中心の授業から、生徒が活動主体の授業への転換を図っ

ていく方針だ。

担任制度の見直し、補習の再検討など 組織的な改革を加速

生徒指導の見直しを起点に改革が始まって10年。今、学校は活気に満ちあふれている。

「生徒の顔付きが以前とはまるで違います。学校に早く来て、朝練習をしたり、自習室で学習したりする生徒が増えました。教師が生徒に一声掛けるだけでボランティア活動に参加するようになったのも、10年前には考えられなかった変化です」（中川先生）
教師の意識改革も進み、「教師は全ての生徒

の担任である」という考え方が浸透した。また、新しい取り組みにも、「どうせやるなら成功させよう」という前向きな雰囲気職員室にみなが持っているという。

新たな改革も進行中だ。組織面では、担任と分掌の力量を高めるため、本誌13年度2月号の当コーナーで紹介した鳥取県立倉吉東高校の事例を参考に、担任業務と分掌業務の切り離しも着手している。学習面では、放課後補習の改善を行っている。社会問題をテーマにしたディスカッションなどの言語活動、各種の外部検定試験の対策講座、百人一首などの教養講座といったような教科学習以外の内容も、放課後補習で取り上げていく予定だ。

情熱 若手教師が語る、指導変革への

生徒の満足度向上が 最大の広報戦略

広報副部長 石井大祐

鷹家校長との面談で、私自身が希望を伝え、広報部へ配属されました。いきなり副部長を任されたのには驚きましたが、熱心に取り組めば取り組むほど、やりがいのある業務であると分かってきました。

広報の仕事は、本校のことをより深く知るきっかけとなっています。校内の情報収集はもちろん、保護者、小・中学校の先生、塾の先生といった学校外の人と会って話すことで、外部から本校がどのように見られているのかを客観的に把握できるようになったからです。時には、「上位層への指導ばかりに力を入れる」「昔の進学実績にあぐらをかいている」など、厳しい意見もいただきます。それを学校に持ち帰り、先生方に伝えて意識改革を促すのも、広報の大切な仕事です。

若手教師に経験を積ませよう^{ほつても}と、意欲やアイデアのある若手教師が各分掌の主任に抜擢されています。ベテランの先生方に支えられつつ、各分掌の業務をけん引していることが、本校に活気をもたらす原動力の1つになっていると思います。学校に活気が生まれ、生徒の満足度が高まれば、おのずとその魅力は外にも広がっていきます。生徒や保護者の声に勝る広報はありません。外部に情報を発信するだけでなく、着実に改革を進め、教育力を高めることが、最大の広報戦略といえるのではないのでしょうか。

今後も学校改革につながる広報のあり方を意識して、学校の内と外の橋渡しに努めたいと思います。